



令和4年度

研 究 報 告

【研究テーマ】

『一人一人の願いに寄り添い、

生き生きと学ぶ姿を目指して』

令和5年1月

京都市立桃陽総合支援学校

I 研究の概要

1. 当校の概要
2. 研究主題
3. 研究主題設定の理由
4. 研究仮説
5. 具体的な取組
6. 研究体制・方法
7. 研究の検証・評価方法
8. 研究組織

II 各グループの取組

1. ICTを用いた体験的な学習の保障
2. 配信授業の工夫
3. 自立活動の目標を念頭に置いた授業の展開
4. 桃陽minimum ～児童生徒の深い学びを目指して～

III まとめ、次年度に向けて

I 研究の概要

1. 当校の概要
2. 研究主題
3. 研究主題設定の理由
4. 研究仮説
5. 具体的な取組
6. 研究体制・方法
7. 研究の検証・評価方法
8. 研究組織

I 研究の概要

1. 当校の概要

京都市立桃陽総合支援学校は、京都市桃陽病院に隣接する本校と京都大学医学部附属病院（以下「京大病院」）・京都府立医科大学附属病院（以下「府立医大病院」）・京都第二赤十字病院（以下「第二赤十字病院」）・国立病院機構京都医療センター（以下「国立病院」）・京都市立病院（以下「市立病院」）にある5つの分教室からなり、京都市全域の分教室を設置していない病院に入院している児童生徒に対し、訪問教育を実施している。また、支援部を中心に病弱特別支援学校のセンター的機能として、分教室が設置されている病院に入院している高校生への教育的支援を行っている。さらに、一昨年度より、小・中学校の通級指導教室担当者に対するサポート及び専門性の向上を図ることを目的として「小中 LD 等通級支援チーム」が設置され、専任教職員は、京都市立小中学校のLD等通級指導教室のサポートを行いつつ、その専門性を校内支援に生かしている。

京都市桃陽病院に入院し、本校に通っている児童生徒は、肥満やアトピー性皮膚炎等、病状は様々だが、一番多いのは、不安障害や適応障害である。背景に、発達障害や家庭環境の問題等があり、前籍校で不登校を経験している児童生徒が多い。そして、一人一人のニーズ、学習進度の違いが著しく、支援の在り方も異なっている。

京大病院・府立医大病院は、『小児がん拠点病院』とされており、小児がんをはじめとする高度な医療が必要な疾患で入院している児童生徒が在籍している。また、市立病院・第二赤十字病院・国立病院にも、慢性疾患や骨折などで入院する児童生徒が在籍しており、それぞれの病状によって入院期間も治療の内容も異なっている。どの分教室においても、児童生徒の体調や治療方針に合わせながら授業を行っているため、教室に全員が登校して対面で授業（以下、対面授業）を行っているとは限らず、病室のベッドサイドをリモートで繋いで授業（以下、配信授業）を行うこともある。最近では、新型コロナウイルス感染症対策のため、病院の方針で対面授業が制限され、配信授業に切り替えて授業を行う機会が増えたこともあって、配信授業の課題解決、授業改善等が喫緊の課題となっている。

訪問教育は、入院期間が1～2ヶ月と短いケースがほとんどであるため、指導の期間も短い。授業は週に3回、1回2時間程度を上限として学習を病院内で行っている。教育保障の拡大・退院後の移行支援として、前籍校からの配信授業の取組も進めている。

高校生支援においては、医療従事者と教育関係者をつなぐ「医教連携コーディネーター」としての役割を担う教職員を数名配置し、在籍する高校や病院関係者との連絡、授業の機器の貸出、本人への聞き取りなど、様々な支援をチームで行っている。生徒たちは、治療を受けながらも体調に合わせて病室から授業に参加し、定期考査を受ける等、つながりを続けている。

2. 研究主題

『一人一人の願いに寄り添い、生き生きと学ぶ姿を目指して』

3. 研究主題設定の理由

当校の児童生徒は、病気による入院や治療に伴う、様々な不安や困りを抱えている。

本校には、情緒や行動面の不調等により、日常生活や学校生活の中で、不安や生きにくさを感じている児童生徒が多く在籍している。入院・入学当初は、前籍校での人間関係におけるトラブルや辛い経験等から、自己肯定感や自己有用感、前向きに生きる意欲の低下、学習空白による学習に対する不安等が多く見受けられる。心理的に緊張しやすく、経験不足や発達特性もあって、人と関わったり協力したりして活動することが苦手な様子が見え始める。一方で、「勉強ができるようになりたい」「高校に行きたい」等、「学びたい」という思いを持っている。仲間と出会い、入院・学校生活を送る中で、様々な経験を通して、少しずつ、苦手なことにも挑戦しようとする前向きな姿が見られるようになってきている。

分教室は、小児がん等、身体の病気のために、入院生活を余儀なくされた児童生徒が在籍している。皆、これまで当たり前だった日常と離れた環境の中で、病状の回復を願い、日々、治療と向き合いながら過ごしている。特に、入院が長期にわたる場合は、治療の進捗状況や学校生活に対する不安等で、大きなストレスがかかるため、心理面のサポートは必要不可欠である。さらに、コロナ禍の影響で対面授業の時間が減ったことで、友達や指導者と接する機会が少なくなり、ベッドサイドでの配信授業が主となっている場合がある。小児病棟外に出ることができず、身体を動かしたり、気分転換したりする機会も少なくなっている。また、病院が企画する楽しい催しは、少しずつ元に戻りつつあるものの、すべてが元通りというわけではない。このような状況にあっても、「学びたい」「友達とつながりたい」と願い、積極的に授業に参加する児童生徒の姿が多く見られる。

このような児童生徒の、「学びたい」「成長したい」「つながりたい」等、一人一人の願いを出発点に、主体的に学習に向かう姿を引き出したい。その際、個々の病気の状態や心理面を把握した上で、本人に寄り添う姿勢を大切にしたい。そうすることで、児童生徒の自己肯定感や自己有用感を高め、自己理解を深め、自ら不安や困りを軽減したり、問題を解決したりする力につなげたい。

これらのことから、今年度の研究主題を『一人一人の願いに寄り添い、生き生きと学ぶ姿を目指して』と設定した。

4. 研究仮説

仮説1 一人一人の児童生徒の願いに立ち返りながら指導方法や内容を明確にしたきめ細やかな指導を行うことは、主体的に学習に向かう姿を引き出され、持っている力を発揮する経験を重ねることにつながる。

仮説2 ICTを活用し、体験的な学習や、人や社会とのつながりを感じることができる学習活動を行うことは、児童生徒の主体的な学習姿勢を引き出し、持っている力を発揮することにつながる。

仮説3 限られた授業時間において、学習内容を精選する等、効率的で効果的な学習を提供することで、一人一人の児童生徒にとって、必要な学びや、求めている学びを届けることができる。

5. 具体的な取組

(1) ICTを用いた体験的な学習の保障

- ①ICT を活用したりリモートでの校外学習や友達とのつながり等、入院中でも体験できる授業方法を探り、企画・実施する。
- ②本校と分教室をリモートでつないで、季節の移り変わりを実況中継する等、友達や指導者と関わり合う授業づくりを行う。

(2) 配信授業の工夫

- ①配信授業における児童生徒の困り等、課題を明確にし、改善に向けて工夫をする。
- ②配信授業の良さを生かした授業の展開を探り、授業力の向上につなげる。
- ③実技教科や、治療や体調で授業に出席しづらい児童生徒についての評価方法を探る。

(3) 自立活動の目標を念頭に置いた授業の展開

- ①各教科の特性を大切にしながら、児童生徒に対する支援方法を共有する。
- ②自立活動の目標を明確にし、丁寧にアセスメントを行いながら、授業の教材や方法、展開を見直す。

(4) 桃陽minimum ～児童生徒の深い学びを目指して～

- ①児童生徒の発達段階を考慮しつつ、教科等の横断的な視点から授業を実践する。
- ②基礎基本をおさえるための学習内容の精選と、効果的な指導方法を検討する。

6. 研究体制・方法

(1) 令和4年度より、2年計画で行う。

(2) 児童生徒の願いを出発点にした、4つの取組(5. 具体的な取組に記載)について、グループに分かれて研究内容を検討し、実践を進める。

7. 研究の検証・評価方法

(1) 各グループで、テーマに沿った指導・支援のあり方について実践を通して検証する。月1回の研究日に交流・協議する。

(2) 月1回の研究推進委員会で、各グループの取組内容を交流・協議する。

(3) 「研究中間交流会」を実施し、各グループの研究について相互検証を行う。

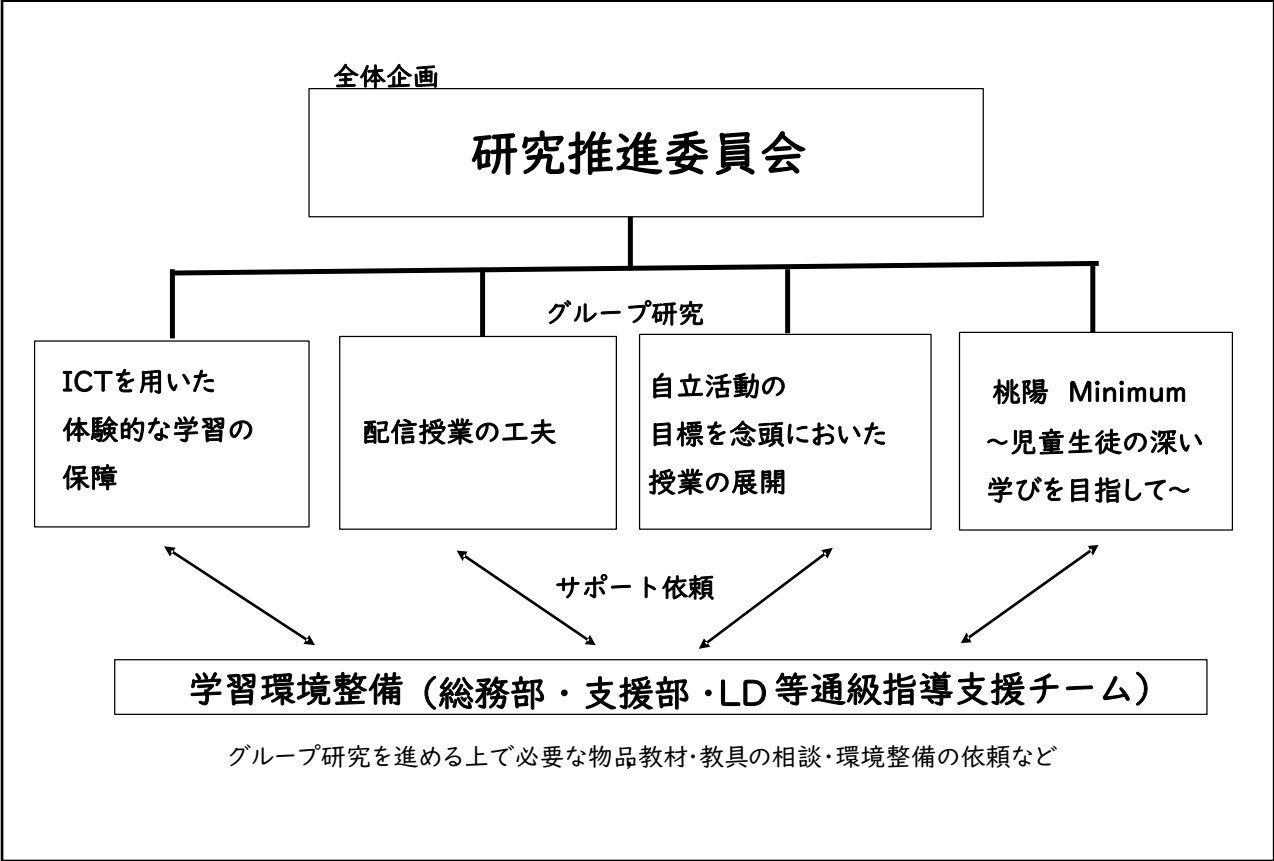
(4) 「研究中間交流会」で各グループの発表後、学校長の講評を受け、次年度につなげる。

8. 研究組織

全体研究の内容や方向性を協議する機関として、本校小学部、本校中学部、分教室、支援部より研究推進委員を選出し、副教頭、研究主任とともに、研究推進委員会を組織した。

各部、教室の枠を超えて研究グループを作り、研究推進委員がそれぞれのグループ代表を担うこととした。また、支援部、総務部、小中LD等通級指導支援チームは、各グループ研究を進める上で、必要な教材・教具、環境整備の相談等、各グループのニーズに応じて、研究に参加することとした。

研究組織図



Ⅱ 各グループの取組

1. ICTを用いた体験的な学習の保障
2. 配信授業の工夫
3. 自立活動の目標を念頭に置いた授業の展開
4. 桃陽minimum ～児童生徒の深い学びを目指して～

1. ICT を用いた体験的な学習の保障

1. テーマに関わる児童生徒の願い ⇒ 研究の目的

【願い】

- ・ 入院中でも校外学習に行ったり、人と交流したり等、いろいろな体験がしたい。
- ・ 季節の移り変わりを知る等、入院生活にメリハリをつけたい。



【目的】

- ・ ICT を活用した、疑似体験の活動を設定する。入院中であっても体験的な学習を増やすことで、日々の充実感を得たり、学習や治療に対して意欲を高めたりできるようにする。
- ・ ICT を通して人や社会とつながる体験を増やし、ものごとに対して、自分から意欲的にならうとする気持ちを高めるようにする。

2. 研究の内容・方法

- ・ 分教室小学部で、校外学習を行う。
- ・ 季節に合わせた、外の様子を体験的に感じられる活動を設定する。
- ・ 自分で操作できるロボット(temi/kubi)等を用いて学習発表会の展示作品を鑑賞する。

3. 研究の記録

①リモート動物園(9月15日実施)

事前授業においてしおりを作成し、服装は外で活動できるもの、手持ちがあればリュックサックで登校する等、「校外学習に行く」という、非日常の主体的な体験活動であるということを意識付けた。また、児童生徒は「入院しているから校外学習に行けない。」「行きたくても我慢しなくてはいけない。」等、いろいろなことに対して諦めがちであることから、入院して分教室に来ているからこそ、できる体験をしているという意識をもてるように、事前学習毎に言葉かけをして意識を高めるようにした。

病院関係者以外の人と関わる経験や、自分から気になることを質問する等、自ら行動を起こす経験を増やすために、当日は、現地にいる園職員さんの講義を聞き、質問タイムを設ける活動を取り入れた。

②リモート鑑賞会(10月29日実施)

支援部とタイアップして行った。各分教室から、本校の会議室(美術作品展示場)の作品を、temi や kubi を使って鑑賞した。

③ サイコロトーク 等

④ リモート節分祭

⑤ リモート水族館



リモート動物園の様子

4. 成果と課題

分教室の児童生徒は、途中で体調が悪くなったり、治療で登校できなかつたり等、思うように身体が動かず、学習に対しても、治療に対しても、前向きになれないことがある。このような児童生徒に対して、ICTを活用し、体験的で、人や社会とつながる活動を行うことで、いろいろなことを諦めなければならない状況にある分教室の児童生徒の心を大きく動かすことができたと考える。

リモート動物園では、画面をじっと見つめる児童の姿が印象的だった。途中で体調不良になり、病室に戻るようになった児童も、ベッドで横になりながらも配信の画面をずっと見ていた。特に、キリンの赤ちゃんが生まれ落ちるところを映像で見せてもらったときは、皆から大きな歓声が上がった。感想に、「もっと話を聞きたかった」と書く児童もあり、画面から伝わる生き物の不思議に、一人一人が感動や衝撃等、大きな刺激を受けた様子だった。

リモート鑑賞会は、支援部と協働で行った。本校での作品展示の案内や進行等については、支援部がサポートし、分教室では、指導者が操作してロボットを動かして鑑賞した。中でも、歓声の声が大きかったのは、分教室の児童生徒一人一人が考えたそれぞれのゆるキャラを、タブレット端末の画面上で一同に介した「ぶんぶんレンジャー」のコーナーだった。それまでは各分教室内で留まっていたのが、初めてお互いの作品を見たことにより、感想や質問等が飛び交った。また、分教室として、目に見える形で一つの作品に出来上がったことで、友達とのつながりを感じたのではないかと考える。たまたま同時に鑑賞に来た本校の児童生徒が、分教室の児童生徒や指導者に言葉をかけ、案内しようとする様子も、心温まる場面で印象的だった。

また、上記以外にも、日々の学習において、ICTを活用した取組を行ってきた（図表1）。科学センター学習、美ら海水族館、プラタナスの木、図書館で本を借りる、畑の配信等、画面越しのやりとりではあるが、できる限り、人や社会とつながったり疑似体験したりする活動を行うようにしてきた。

引き続き、ICTを活用した様々な取組を行うことで、今後は、児童生徒の方から、「配信で見てみたい」「他にも〇〇のことを知りたい。見てみたい」等の声が挙がってくることを期待している。さらに、より人とのつながりを感じ、楽しく学ぶようにすることで、病気や厳しい治療を乗り越えようとする児童生徒の気持ちを支えていきたい。

一方で、その時の授業の組合せや、状況によって、使用する機器の画質や通信状態が悪いという課題もある。画像が乱れたり、音が聞き取りにくかったり等の機器トラブルは、他から情報を得られない児童生徒にとって大きなストレスになるため、できる限りストレスのかかりにくい環境を整えることが大切である。より精度の高い機器を使用することや、台数を増やすこと等も、検討していく必要があると考えている。

図表Ⅰ 令和4年度 分教室リモート体験 一覧

実施月	学部	授業名(单元名)	児童・生徒の活動
6, 7, 9, 12, 2月	小	総合 畑の交流	・本校の畑で育てている野菜の様子を見たり、質問したりする ・野菜について調べたことを発表したり、本校の調理実習の様子の発表を聞いたりする ・野菜クイズ・野菜ビンゴなどのゲームで交流する
7月	小中	総合 海外で生活する人と交流	・JAICA でルワンダ在住の人から現地の様子を聞く
7, 9, 11, 2 月	小中	自立活動 ぶんぶんタイム	・児童生徒が企画したみんなで楽しめる取組をする 今年度の例: zoom のホワイトボード機能を使ったゲーム
9月	小	総合 リモート動物園	・京都市動物園の様子をリアルタイムで見る ・京都市動物園職員の講義をうける
10月	小中	生活・理科 プラネタリウム	・府立分教室の教室で行うプラネタリウムの様子を京大・市立分教室から見る
10月～12 月	小	小3 理科 『動物のすみか』 『地面のようす』	・本校の校舎外の様子を見る ・ダンゴムシなどの生き物がいそうなところを予想し、探す ・地面にできるかげと太陽の位置関係などを見る
11月	小中	特別活動 学習発表会展示鑑賞	・kubi や temi などのアバターロボットを操作し、本校の展示物を鑑賞する
11月	小	小4・小5 国語 『プラタナスの木』 『秋の夕暮れ』	・府立医大の庭にあるプラタナスの木や、季節の植物の様子を見る
11, 2月	小	生活・理科 ノートルダム女子大学との交流(ND ラボ)	・理科学的な実験を配信で観ながら、自分たちでも実際に用意した材料を使ってやってみる
11, 12, 1, 2 月	小中	自立活動 ピクケの作る絵本	配信で講師の先生とやり取りしながら、ipad を使って絵本作りをする
12月	小中	総合 リモート修学旅行 ・琉球大学博物館 ・沖縄美ら海水族館	・沖縄の琉球大学博物館を訪問し、学芸員の解説を聞く ・美ら海水族館を訪問し、職員の解説を聞いたり、ジンベエザメのエサやりを見たりする
12月	小	国語 本校の図書室の本を借りよう	・kubi や temi などのアバターロボットを操作し、本校の図書室の本を選ぶ
12月	小中	理科 科学センター学習	・本校児童生徒の科学センター学習の際に、職員の話の聞いたり、実験の様子を見たりする
12月	中	家庭科 リモート調理実習	・kubi や temi などのアバターロボットを操作し、本校の家庭科室にいる教員とやりとりしながら、調理をする
1月	小中	自立活動 校長先生とトーク	・kubi や temi などのアバターロボットを活用し、校長先生と話したり、校長室の様子を見たりする

2月	小	総合 節分の行事に参加しよう	・吉田神社の節分会の様子をリアルタイムで見る
2月	小	総合 リモート水族館	・京都水族館の様子をリアルタイムで見る
3月(予定)	小	自立活動 本校と分教室で交流しよう	・児童生徒会で企画し、ゲームなどを通じて交流する

※参考（「リモート動物園」児童生徒・教職員・保護者の感想から）

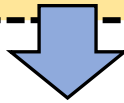
- ・病院の中で過ごしている子どもたちにとって、リモート遠足は楽しく興味のある活動になった。
- ・途中で体調不良になり、病室に戻ることにりましたが、ベッドで横になりながらも、画面をずっと見ていて、病室に様子を見に行くと、「お話がおもしろかった」と言っていました。
- ・子どもたちの様子を見ていて、じっと見つめる姿、大変印象的でした。小2の男児は、途中しんどくなり、病室に戻ったのですが、横になりながら、でも、配信をみたいということでパソコンを持っていったようです。
- ・低学年児童は感想に、「すごい！」と素直な気持ちを書いていた。
- ・病室から保護者と一緒に動物の様子を画面で見て、とても楽しそうな様子が見られた。レッサーパンダがトンネルを通り抜けたときは、「初めて見た～！かわいい！」と大喜びしていた。
- ・感動と衝撃があったと思います。キリンの赤ちゃんが生まれ落ちるところ（映像）はびっくりしていたようです。
- ・動物たちが動く様子がよく見えたので、歓声を上げながら見ていました。
- ・病室でお母様と一緒に画面を食い入るように見ていました。動物が大好きなので、動物が見えたら大興奮でお母様に伝えていたそうです。
- ・ライブで動物の様子を見ている児童は生き生きしていた。今、なんという動物を見ているかをしっかりと認識できたように思う。
- ・講演では、シマウマやキリンの出産シーンが映像で紹介されたり、卵の殻から生まれる様子の紹介があったり等、普段見ることができない貴重な場面を大変興味深く見ていました。
- ・講演会では、児童は画面を見て、話をよく聞いていました。「もっと話を聞きたい」と感想に書いていました。
- ・キリンの出産シーンでは、「キリンの赤ちゃん、（床に）落ちるで。落ちてても骨は折れない。」と教えてくれました。
- ・同じ哺乳類でも、卵から生まれる小さく生まれる等色々な生まれ方があることに興味をもっている様子でした。
- ・動物の名前や生息地が書かれた看板や動物園の方が作成されたプチ情報などを映してもらえることで、動物についてより詳しく知ることができました。（実際に動物園に行っていたら、看板を見ない子もいると思う。）
- ・動物を直接見ることはできなくても、画面から伝わる生き物の不思議にくぎづけだったように思います。出産シーンをふくめ、大変貴重な映像だねとふり返りの中で子どもたちと話をしていました。

2. 配信授業の工夫

1. テーマに関わる児童生徒の願い ⇒ 研究の目的

【願い】

- ・ 配信授業のストレスを少しでも解消したい。
- ・ 楽しい配信授業を受けたい。
- ・ 出席したくても出席できない授業があるが、勉強は頑張りたい。



【目的】

- ・ 当校では、分教室間、本校と分教室等、授業の多くがオンラインでつないだ配信授業で行われている。配信授業では、通信状況等で機器トラブルが起こりやすく、児童生徒にストレスがかかりやすいため、少しでもストレスなく児童生徒が授業を受けられるように、配信授業の問題点や課題を探り、解消を目指す。
- ・ 入院しながら学習を続ける児童生徒は、治療のため出席したくてもできない授業が多い。そうしたやむを得ない理由での欠席による児童生徒の不利益を少しでも減らす。

2. 研究の内容・方法

- ① 分教室の児童生徒、指導者にアンケートを取り、配信授業の課題を探る。
- ② 各指導者の授業欠席時の対応を共有し、児童生徒が欠席した際の評価方法や指導方法を探る。

3. 研究の記録

- ① 配信授業を受けている児童生徒、配信授業を行っている指導者に、配信授業の課題点についてアンケートを取った結果、児童生徒は配信授業におおむね順応しており、指導者の方が配信授業に対して困りを感じていることがわかった。

特に気になった質問の詳細は以下の通りである。

児童生徒

Q. 配信授業は質問しにくいですか？

- 配信授業はとても質問しにくい 0
- 配信授業は少し質問しにくい 4
- 対面授業と変わらない 7
- 配信授業の方が質問しやすい 1



Q. 配信授業は疲れやすいと感じますか？

- 配信授業はとても疲れやすい 2
- 配信授業は少し疲れやすい 0
- 対面授業と変わらない 9
- 配信授業の方が疲れにくい 1



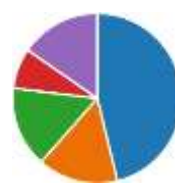
Q. 配信授業は指導者との距離を感じますか？

- 配信授業はとても距離を感じる 3
- 配信授業は少し距離を感じる 4
- 対面授業と変わらない 5
- 配信授業の方が近く感じる 0



Q. 配信授業が途切れた際どう感じていますか？

- 早くつながってほしい 6
- すぐにつながらなくてもよい 2
- 自習課題があると嬉しい 2
- ミライシードを解いておきたい 1
- 途切れた時は休憩していたい 2



指導者

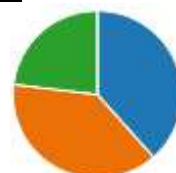
Q. 配信授業は理解度を把握しにくいですか？

- 配信授業はとても把握しにくい 4
- 配信授業は少し把握しにくい 9
- 対面授業と変わらない 0
- 配信授業の方が把握しやすい 0



Q. 配信授業は疲れやすいと感じますか？

- 配信授業はとても疲れやすい 5
- 配信授業は少し疲れやすい 5
- 対面授業と変わらない 3
- 配信授業の方が疲れにくい 0



Q. 配信授業は児童生徒との距離を感じますか？

- 配信授業はとても距離を感じる 3
- 配信授業は少し距離を感じる 10
- 対面授業と変わらない 0
- 配信授業の方が近く感じる 0



Q. 配信授業中に映像が途切れることがありますか？

- よくある 2
- たまにある 10
- ほとんどない 1
- ない 0



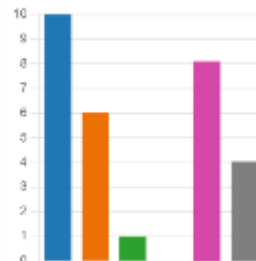
Q. 時間通りに授業を始められないことは？

- よくある 5
- たまにある 8
- ほとんどない 0
- ない 0



Q. 時間通りに授業を始められない理由は？(複数回答可)

- 時間通りに入室できない(児童生徒) 10
- 時間通りに入室できない(指導者) 6
- 入る場所を間違えていた(児童生徒) 1
- 入る場所を間違えていた(指導者) 0
- 通信環境が悪く、つながらなかった 8
- 欠席連絡が伝達できていなかった 4



② 配信授業を行っている指導者に、児童生徒が治療のためやむを得ず欠席した際の対応を調査したところ、以下のような回答が得られた。

- ・欠席扱いにするが、課題を提出すれば成績に加算する。
- ・出席率に応じて成績の評価比率を調整して、治療による欠席がマイナスにならないようにしている。
- ・配信授業に参加していても、画面に出てこれない際は欠席扱いにしている。
- ・欠席は欠席扱いにしているが、成績をつける際に出席点の割合は低くしている。
- ・欠席した際は、後日個別で授業をしている。
- ・ミライシードの練習やプリントを出して学習内容の補充をしている。
- ・小学生は学習する予定の内容を次の時間に延期する。中学生はプリントを渡して自主学習してもらう。
- ・課題提出で生徒の理解度は確認しているが、出席にかわる対応はしていない。

4. 成果と課題

今年度から本格的に本校と分教室間の配信授業が始まり、分教室間の配信授業も昨年度以上に主として行われるようになった。それに伴い、年度当初はネットワークや機器の不具合をはじめ、様々な混乱

が見られた。

11月に実施したアンケートでは、機器やネットワークのトラブルに関して、多くの教員が「たまにある」と答える程度にとどまる等、年度当初に比べると安定して配信授業が行えるようになりつつある。その一方で、「時間通りに授業が始められない」と答えた指導者は多く、児童生徒、指導者共に時間通りにビデオ会議に入室できないことがよくあるという現状が見受けられる。授業時間の確保という面から、スムーズにビデオ会議に参加するための工夫を凝らす必要がある。また、「配信授業は対面授業に比べて児童生徒との距離を感じる」「配信授業は対面授業と比べて児童生徒の理解度を把握しにくい」と、アンケートに参加した全教員が回答しており、次年度への課題が残る。

指導者側が配信授業のやりにくさや児童生徒との距離感に戸惑っている一方、児童生徒側はあまり対面授業との差を感じていないことが今回の調査でわかった。「配信授業は対面授業と比べて質問がしにくい」「先生との距離を感じるか」などの質問に対して、多くの児童生徒は「対面授業と変わらない」と回答しており、「対面授業よりも配信授業の方が質問しやすい」という回答もあった。

「配信授業と対面授業のどちらが疲れるか」という質問に対しても13人中10人の教員が「配信授業の方が疲れる」と答えたのに対して、「配信授業の方が疲れる」と回答した児童生徒は12人中2人にとどまっており、多くの児童生徒は「変わらない」と答えていた。指導者に比べて児童生徒の方が配信授業に順応しているようであった。

欠席時の対応については、学習内容の補填という点においては指導者が工夫をしながら取り組んでいることがわかった。成績面については、指導者によって対応が異なっているのが現状である。特に中学生は成績が高校受験に大きな影響を与えることもあり、治療によるやむを得ない欠席に対する合理的配慮の方法を学校全体で考えていく必要がある。この点も次年度への課題としたい。

3 自立活動の目標を念頭に置いた授業の展開

1. テーマに関わる児童生徒の願い ⇒ 研究の目的

【願い】

- ・勉強ができるようになりたい
- ・自分の良いところ、強みを知り、自信をつけたい
- ・自ら授業に参加して、指導者に褒められたい(認めてもらいたい)



【目的】

当校は、病弱児教育専門の支援学校として、準ずる課程で教科指導を行うと同時に、自立活動の目標を立て、教育課程に自立活動の時間を設定し、目標達成に向けて取り組んでいる。そのため年度末には、各教科の評価に加えて、個別の包括支援プランに基づいた自立活動の目標を、6区分27項目の中から選択し、評価を行っている。中でも「心理的な安定」区分、「人間関係の形成」区分の項目を目標に挙げている児童生徒が多い。

教科指導においても自立活動の目標を念頭に置き、授業づくりをすることで、それぞれの児童生徒が身に付けるべき学力を培い、学習に対する意欲をはぐくむことになると考える。そうして、心身の調和的発達の基盤を培うことで、自分の強みを知り、自信をもって物事に取り組む姿勢につなげていきたい。

2. 研究の内容・方法

- ①個別の包括支援プランの自立活動の目標を確認し、話し合いで対象児童生徒を決定する。
- ②自立活動の目標達成に向け、授業の方法や展開、教材等を見直し、実践する。
- ③それぞれの指導者(各教科)のアプローチと対象児童生徒の反応・変容を共有し、より効果的な指導方法を探る。

3. 実践の記録

【自立活動の目標】

対象生徒 A は、本校中学部の生徒である。学習面では、授業や課題に真面目に取り組み、様々な教科で少しずつ自信を身につけている様子がうかがえる。コミュニケーション面では、緊張する場面などで特に声が小さくなり、授業中に自分の意見を自ら発することはほとんどない。一方で、スポーツをするなどの好きな活動中や、病棟でリラックスして友達と話している場面では活気のある大きな声を出している姿が見られる。前籍校への復学や卒業後の生活や学習に向け、多くの場面で相手に伝わる声量で話すこと、

さらに、自分をとりまく周りの人に自分の気持ちを言葉で伝えることができるようになることを目指している。

個別の包括支援プランの自立活動についての「長期目標」「短期目標」は以下の通りである。

長期目標	短期目標
1. 自らあいさつをする 2. 自分の気持ちを言葉で伝える	1. 学習の始まりや終わりのあいさつで相手に聞こえる声であいさつをする 2. 話し合い場面等で自分の意見や考えを発言する

【各教科の取組の例】

月1回の研究日までに、各教科で「実践したこと」「生徒の反応」「成果と課題」を書いた「取組のまとめ」を作成、それをもとに各教科の取組を交流し、生徒 A の変容を話し合った。その後、効果的だった取組を他教科でも取り入れることで、生徒 A の自立活動の目標に迫っていった。以下に取組の例の一部を紹介する。

5. 成果と課題

対象生徒の選出に際して、各生徒の個別の包括支援プランの自立活動の目標をグループで交流したことで、効果的な支援方法（※参照）について共通理解することができ、その後の授業づくりに生かせるよい機会となった。さらに、対象生徒 A の自立活動の課題について、関わる指導者全員が意識して授業づくりを実践した事で、他の教科でも取り組める内容が具体化され、取り組むことができた。（図表2）

理科の授業のディベートの様子を撮影して、研究日の際に見ることにした。生徒の様子がわかりやすく、情報共有がしやすいという意見があった。来年度は、実際に授業の様子を撮影（参観）して、取組内容とその時の対象生徒の反応を見ながら意見交流をすることにも取り組んでいきたい。

今年度は、担任が中心となり個別の包括支援プランの目標を立てた。今後は、グループで意見を出し合いながら、本当につけたい力は何かを見極め、児童生徒の自立活動の目標の検討を行っていきたい。

※効果的な支援方法

- 話型を提示する等、発表の仕方のパターンを増やしていく。
- 各教科の授業で自分の意見を言うことができるような場面をつくる。（ディベート・グループワーク等）
- 自信につながる（自己肯定感が上がる）ように、学習内容の定着を図る。
- 自立活動に使えるコミュニケーションカードゲームなどを用いて、小集団で話す経験を増やす。 等

(図表2)

教科	実践内容	生徒の変容
英語	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回の授業で複数回(20回以上)の発表の機会を設ける。 ・活動に対しての評価を良かったところ、改善したほうがいいところを交えて伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表の機会では、以前より英語に自信が持てるようになるのに比例して英語の授業中の声量も増してきている。 ・しっかりと聞こえる声で音読することができる。
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・話型のパターンを提示する・増やしていく。 ・指導者から発表者を指名するのではなく、友達同士指名してもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見を言う場面は多くないが、パターン化すると発言できることが増えている。 ・友達の発表を聞いてから発表する場面を設定すると大きな声で発表できることが多い。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・ディベートを取り入れ、自分の意見を発表する場面をつくる。 ・友達と一緒に前へ出て、人前で少し大きな声で発表する機会を増やす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ディベートの形式をとることで、より説得力のある説明をするために自分の意見について詳しく調べ、友達と一緒に発表できた。
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中の質疑応答の場面を増やす。 ・雑談を交えて話しやすい雰囲気をつくる。 ・できたプリント等を手渡すときに、「お願いします」「見てください」と言うなど、立ち居振る舞いを指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・以前はレポート等を提出する際に、何も言わずに渡すことが多かったが、小さい声だが、少しずつ「お願いします」と言えるようになり、意識できている様子がうかがえる。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・回答の発表方法を工夫する(言葉で説明・前のホワイトボードに書いて説明等)。 ・『標本調査とデータの活用』の単元で、自分で調べたことを図やグラフを用いて発表する場面を設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・挙手をして発表することは難しいが、指名され、解答に自信がある場合は聞こえる声で発表できる。
総合	<ul style="list-style-type: none"> ・学習発表会で、指導者がモデルとなり、声量や身振りなどを示す。 ・緊張が高まらないように、和やかな雰囲気づくりに努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初めは緊張もあり、身振りも声も小さかったが、努力する友だちから刺激を受けて、本番、大きな声で発表することができ、アドリブを入れる等楽しむ様子が見られた。

4. 桃陽 minimum ～児童生徒の深い学びを目指して～

1. テーマに関わる児童生徒の願い ⇒ 研究の目的

【願い】

- ・前籍校から遅れをとりたくない。
- ・学習空白をつくりたくない。
- ・限られた時間で勉強を頑張りたい。



【目的】

当校の児童生徒は、病気や心身の不調等の理由から授業に出席したくてもできないことも多く、学習空白が生まれやすい。しかし、日々の授業は進んでいくため、頑張って参加できた時に授業の内容が分からず、学習意欲が低下することになりかねない。また、一度学習したことでも、定着に時間がかかる児童生徒もいる。指導者としても、限られた授業時間の中で、児童生徒になるべく沢山のことを学んでほしいと願っている。

そこで、複数の教科を教えている指導者が教科横断的な授業をしたり、授業のポイントを焦点化した授業をしたり等、1時間の中で学習できる内容を充実させるための方法を模索していく。

2. 研究の内容・方法

- ・本校は、単元配列表を作成し、教科横断的な学習ができそうなところを探す。その上で、一つの授業の中で複数の教科を教科横断的に学習する授業を実践し、授業内容の充実を図る。
- ・分教室は、少ない授業時間の中でも他教科の内容も含めた総合的な授業を行ったりして学習内容の充実を図る。
- ・配信授業では、授業のポイントを焦点化した内容をオンデマンド配信授業で実践し、限られた時間の中で取り組むことができることと、学習内容の充実を図る。

3. 研究の記録

本校

単元配列表(図表3)を作成し、各教科でリンクできるところを検討した。それをもとに、一つの授業の中で複数の教科を横断的に学習する授業を実践することで、授業内容の充実を図った。小学部6年国語の「日本文化を発信しよう」という単元の授業の中で、既習の社会科の歴史や算数科の復習を取り入れることができるよう構成した。

(図表3)

令和4年度 桃陽総合支援学校単元配列表(6年生)

教科	月	4月	5月	6月	7月	8・9月
国語		つないで、つないで、一つのお話 春の河 小景異情 続けてみよう 帰り道 地域の施設を活用しよう 漢字の形と音・意味 春のいぶき	聞いて、考えを深めよう 漢字の広場① 笑うから楽しい 時計の時間と心の時間 [情報]主張と事例 話し言葉と書き言葉	たのしみは 文の組み立て 天地の文 [情報]情報と情報をつなげて伝える とき	私たちにできること 夏のさかり 私と本 森へ	せんねん まんねん いちばん大事なものは 利用案内を読もう 熟語の成り立ち 漢字の広場②
社会		わたしたちの生活と政治				
		わたしたちのくらしと日本国憲法	国の政治のしくみと選挙	子育て支援の願いを実現する政治 震災復興の願いを実現する政治 縄文の村から古墳のくにへ	天皇中心の国づくり	貴族のくらし 武士の世の中へ 今に伝わる室町文化
算数		わくわく算数学習 対称な図形 文字と式	分数×整数、分数÷整数 分数×分数	分数÷分数 資料の調べ方	わくわく算数ひろば ・どんな計算になるのかな ・算数の自由研究	円の面積 立体の体積 比とその利用

10月	11月	12月	1月	2月	3月
やまなし [資料]イー・ハタローの夢 言葉の変化 秋深し みんなで楽しく過ごすために [コラム]伝えにくいことを伝える	漢字の広場③ 『鳥獣戯画』を読む [情報]調べた情報の用い方 日本文化を発信しよう 古典芸能の世界一演じて伝える カンジエ博士の漢字学習の秘伝 漢字の広場④	狂言 柿山伏 「柿山伏」について 大切にしたい言葉 漢字の広場⑤ 冬のおとずれ	詩を朗読しようか 仮名の由来 メディアと人間社会 大切な人と深くつながるために [資料]プログラミングで未来を創る 漢字を正しく使えるように [コラム]覚えておきたい言葉	人を引き付ける表現 思い出を言葉に 今、私は、ほくは	漢字の広場⑥ 海の命 中学校へつなげよう 生きる 今、あなたに考えてほしいこと
日本の歴史				世界の中の日本	
戦国の世から天下統一へ 江戸幕府と政治の安定	町人の文化と新しい学問 明治の国づくりを進めた人々	世界に歩みだした日本	長く続いた戦争と人々のくらし 新しい日本、平和な日本へ	日本とつながりの深い国々	世界の未来と日本の役割
表を使って考えよう(1) 場合をあげて調べて 図形の拡大と縮小	およその形と大きさ 比例と反比例	表を使って考えよう(2) 変わり方を調べて わくわく算数ひろば ・見積もりを使って ・算数ラボ	場合を順序よく整理して	図を使って考えよう 割合を使って わくわく算数ひろば ・すごろく ・みらいへのつばさ	6年のまとめ ひろがる算数 学びのサポート

授業(本時)に取り入れた教科横断的な学習

(図表4) 児童の作成したパンフレット

(国語)『日本文化を発信しよう』の単元で、調べたことを
パンフレットにまとめる。(図表4)

(算数)算数で学習した『資料の調べ方』を復習し、
アンケート結果をグラフにまとめる。

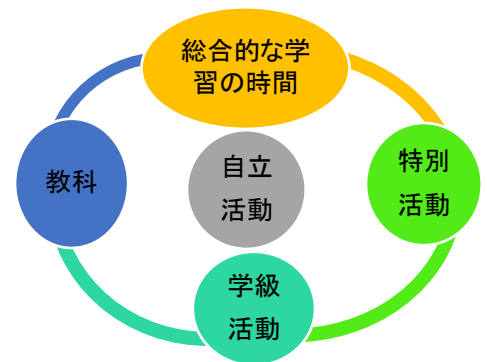
(社会)『将棋の歴史』を調べるにあたって、歴史クイズ
などで、江戸時代の文化について復習する。



分教室

総合的な学習で、「記者体験」の取組を行った。この取組は、取材活動を通して、①人とうまくコミュニケーションをとる、②取材した情報を効果的に活用する、③実社会で活躍されている方のお話を聞くことを通し、社会のことをよく知り、『なりたい自分を探す』ことを目的としている。取材の前には、スキル学習として、①「情報の集め方・発想の仕方」②「電話のかけ方（敬語の使い方）」③「インタビューの仕方」④「メモの取り方」⑤「カメラの効果的な撮り方」⑥「『この人に学ぶ』・・・取材する際、話題の中心にするものを決定する」等を学習した。その後、松本先生、石原校長先生、ルワンダで国際協力をされている山本さんに取材し、A4の大きさの新聞にまとめた。

このような取組を、国語科の学習内容でも取り上げ、授業で説明したことを総合的な学習の時間や自立活動等で実践し深めていった。（図表5）



図表5 イメージ図

配信授業

小学部の算数、中学部の数学の学習において、単元ごとにポイントを焦点化し、授業内容を工夫した。また限られた時間の中で、取り組むことができるよう、中学2年において連立方程式、中学3年において二次方程式について、解き方のパターンについて焦点化した内容のオンデマンド配信授業を行った。

4.成果と来年度に向けた展望

本校

学習の定着が一度では難しい児童にとっては、既習の学習内容を復習することは効果的であった。定期的に振り返ること、特に歴史については定着している様子がみられた。一方で、学年が上がるにつれて学習内容が細分化し、教科横断的な授業を考えることが難しくなる。来年度は、教科書の内容に捕らわれずに授業を行うことを検討してみても良いかもしれない。また、小学部では一人の指導者が複数の教科を教えているため、教科横断的な学習を検討しやすいが、中学部では教科担当制になっている。分教室での実践のように、授業の内容を復習するのではなく、授業の中で他教科の授業の目標を取り入れた学習をするということも考えられる。次年度は、他の学部・学年でも授業を実践していきたい。

分教室

記者体験を始める前に敬語の学習を全学年で取り組み、本校の先生に電話を掛けたり、取材活動を行ったりしたことで、敬語を意識して話すことができ、国語で学んだことを実践することができた。また、3年国語の内容の「3年生の修学旅行記を編集する・文章の種類を選び構成を工夫して魅力的な紙面を編集する」では、修学旅行に行けなかった3年の生徒がルワンダ新聞作りに取り組んだ。新聞名、記事の内容と見出し、興味を引き読みやすいようなレイアウトなどを考えた。うまくいかないときは写真の大きさで調整した。特に新聞名や小見出しを考えるとときには「報道文を比較して読もう」で学習したことを思い出し、「ルワンダ新聞」と名付けていたものを「ルワンダの魅力」と興味を引く新聞名に変更することができた。この他にも、1年2年の「聞き上手になろう」を学習して、取材活動を行い、魅力の

ある回答を聞き出すことができた。次年度も、引き続き、総合的な学習と自立活動と教科の学習内容をクロスさせ限られた指導時間で学んだことを深められる授業を展開していく。

配信授業

分教室の生徒には、治療などで授業を受けることができなかったが、放課後や休日などには時間があるというケースがみられる。

授業内容を問題の解き方のパターンについて焦点化したことで、生徒は、限られた時間の中で学習問題を解くことができるようになり、学習内容を定着することに効果が見られた。そして、オンデマンド配信授業にしたことで、自分の使える時間で授業を受けることができ、学習空白を埋めることに効果が見られた。また、授業内容で視聴したいところだけを視聴でき、繰り返して視聴することができたため、学習内容を充実させることにも効果が見られた。

今回は、問題を解くことについて焦点化したため、生徒の学びは問題を解くことで終わってしまった。次年度は、学習内容を深めるための工夫をする。また、リアルタイムでの質問や意見交流ができるように代替手段を用意して、授業を展開していきたい。

Ⅲ まとめ、次年度に向けて

Ⅲ 研究のまとめ

今年度は、児童生徒の「願い」から導いた、4つの取組「(1) ICTを用いた体験的な学習の保障」「(2) 配信授業の工夫」「(3) 自立活動の目標を念頭に置いた授業の展開」「(4) 桃陽mini mum 児童生徒の深い学び」を研究の重点とし、学部・教室の枠を超えた縦割りのグループを構成して研究を進めてきた。この4つの重点から、今年度の研究を振り返る。

〔研究仮説〕

(※ I の4に記載)

仮説1 一人一人の児童生徒の願いに立ち返りながら指導方法や内容を明確にしたきめ細やかな指導を行うことは、主体的に学習に向かう姿が引き出され、持っている力を発揮する経験を重ねることにつながる。

仮説2 ICTを活用し、体験的な学習や、人や社会とのつながりを感じることができ学習活動を行うことは、児童生徒の主体的な学習姿勢を引き出し、持っている力を発揮することにつながる。

仮説3 限られた授業時間において、学習内容を精選する等、効率的で効果的な学習を提供することで、一人一人の児童生徒にとって、必要な学びや求めている学びを届けることができる。

仮説1

一人一人の児童生徒の願いに立ち返りながら指導方法や内容を明確にしたきめ細やかな指導を行うことは、主体的に学習に向かう姿が引き出され、持っている力を発揮する経験を重ねることにつながる。

当校の児童生徒は、不登校や治療の状況による学習空白、病気による学習意欲の低下等、様々な事情を抱えており、日常生活や学習場面で様々なつまずきや困難を感じながら生活している。このような児童生徒の、病気に向かう意欲を育て、社会性を育むためには、学校生活全般を通した、自立活動の指導が重要である。そのため、当校では、個別の包括支援プランを作成し、一人一人の目標達成のために、どのように指導したり支援したりしていくのかを明確にして、教育活動を行っている。

個別の包括支援プランを真ん中においた、当校のこれまでの教育実践において、例年課題として挙げられていることは、指導者間の密な情報共有と、共通理解のもとでの一貫した支援の難しさである。特に、中学部においては、教科担任制であることや、教科特性もあって、授業の流れや指導方法にズレが起こりやすい。そのため、今年度も、指導者間の連携を大切にして取組を進めてきた。

「(3) 自立活動の目標を念頭に置いた授業の展開」グループでは、「勉強したい」「自信を持ちたい」「認められたい」等の、児童生徒一人一人の「願い」の実現に向けて、児童生徒が自ら活動に向かうための授業の工夫を行ってきた。対象生徒 A に対する実践においては、各指導者が行っている有効な支援を、他教科での実践に広げたことで、生徒が自信を持って発言する場面が増えることにつながった。「できた」という経験の積み重ねは、「病気と向き合っていこう」という意欲にもつながっていくと考える。今後も、指導者間の連携を密にし、より教科横断的に実践を行い、児童生徒の力を引き出すようにしていきたいと考える。

仮説2

ICTを活用し、体験的な学習や、人や社会とのつながりを感じることができ
る学習活動を行うことは、児童生徒の主体的な学習姿勢を引き出し、持って
いる力を発揮することにつながる。

ICTは、場所や時間の制約を超えた学びの場を保障できるだけでなく、学習意欲の向上や心理
的な安定等にも有効であり、学習上の効果が高まることから、当校の日々の教育活動に欠かせな
いものとなっている。

当校の児童生徒は、治療の進捗状況やその日の体調、病院の方針等により、授業に参加できな
いことがある。特に、分教室については、動植物の持ち込みを制限されていたり、病院から出るこ
とができなかったり等、生活や学習上の制限が多い。そのため、積極的にICTを用い、オンラインで
の校外学習や社会見学、観察、交流等、児童生徒の体験を補完していくことが重要である。

分教室においては、日常的にICTを活用して授業を行っているが、今年度は、「(1)ICTを用
いた体験的な学習の保障」グループにおいて、校外学習や、ロボットを使った活動等、児童生徒の
体験の幅をより広げることができ活動を探求してきた。「分かった」「面白い」という充実感は、児
童生徒の自信になり、病気や治療を乗り越えようとする意欲につながっていくと考える。ネットワー
クと機器の課題が残るが、現状を全てひっくるめて、より有効な取組ができるよう、次年度も引き続き
模索していく。

また、今年度は、配信授業のコマ数が、昨年度より増えているにもかかわらず、突然ネットワークが
切れる、遅れる、音声が入らない等のトラブルが頻繁に起こっていた。そのため、ネットワーク環境や
機器の整備等、ハード面を整える一方で、機器操作やトラブル時の対応等、配信スキルを身につけ
ることが喫緊の課題であった。同時に、今後も配信授業が増えていくことを想定したとき、配信授業
のメリットとデメリットを児童生徒の視点からも把握する等、配信授業のあり方そのものについての
検証を行っていく必要があると考えた。

現在、年度当初に比べて、トラブルは減り、指導者の力量も全体的に上がっている。しかし、「(2)
配信授業の工夫」グループの調査から、配信授業に対する困りは、児童生徒よりも指導者が感じて
いるという結果が出ている。次年度は、課題解決に向けて、引き続き研究を進めていきたい。

仮説3

限られた授業時間において、学習内容を精選する等、効率的で効果的
な学習を提供することで、一人一人の児童生徒にとって、必要な学びや
求めている学びを届けることができる。

当校の児童生徒は、治療の進捗状況やその日の体調、病院の方針等により、授業に参加できな
いことがある。また、不登校や治療の状況による学習空白、病気による学習意欲の低下等、それぞ
れに事情を抱えている。環境も時間も、指導内容までもが制限を受ける中での各教科等の指導であ
るため、時間を有効に使い、どのような病気・障害があっても楽しく学べる方法を考えていくことが大
切である。

当校では、かねてより、各担当者が、児童生徒の実態に合わせて、効率的で効果的な授業を工夫して行ってきたが、個々の実践に留まっている現状がある。さらに、コロナ禍になったことや、GIGAスクール構想が進んだことで、授業形態も多様化しているため、現在の状況において、効率的で効果的な指導方法を、日々の教育実践において検証し、指導者全体で共有していくことが大切であると考えた。

「(4) 桃陽 minimum」における、3名の指導者による実践は、学習内容や教科の特性、児童生徒の実態、授業形態等を踏まえて、教科横断的に関連的な指導を行う形態と、基礎基本の内容を焦点化した指導を行う形態の、2通りの方法で進められてきた。特に、オンデマンドでの配信授業は、新たな取組であったが、限られた時間の中で、自分のペースで、学びたいところを好きなだけ学ぶことができ、まさに、効率的で効果的な取組となった。

いずれにしても、知識と生活との結びつきや、教科等を超えた学習の視点は、当校の教育活動に必要不可欠である。そして、今後は益々、ICTのノウハウが求められることも予想されるため、指導者間で、実践や工夫の共有、相談を行いながら、取組を続けていきたいと考える。

今年度は、児童生徒の願いをもとにした、上記4点に重点をおき、研究を進めてきた。改めて、病弱支援学校としての役割を再認識することができた。

今後も、児童生徒が生き生きと学ぶことができるよう、病気のときだからこそ行う教育を充実していきたいと考えている。